

B-102 和式ふとんに関する研究(3) 敷きふとん内容綿の寝床気候に及ぼす影響
武庫川女大家政 八木下登代子 橋本富美子 ○後竹葉子 豊田美景
大阪府公害センター 藤井徹

目的 敷きふとんの使用状況調査から、木綿わたの使用率が圧倒的に高く、その他のわたの使用率は低い。一方、掛けふとんの使用実験結果から合繊わたを使用する場合も保温性において木綿わたとはほぼ同様の結果が得られることを報告した。ここでは、この合繊わたを敷きふとんとして使用する場合の適否・問題点について検討を行った。すでに秋季における寝床実験の結果を関西支部会において報告したが、今回は冬季・春季・夏季の実験結果について秋季結果と比較しながら報告する。

方法 敷きふとん内容綿として、木綿わた(木綿100%)・合繊わた(ポリエステル100%)・混合わた(木綿50%+ポリエステル50%)の3種を用いた。掛け用としては、各季節にあわせて通常用いられているもの、すなわち冬は掛けふとん(ポリエステル100%)+毛布(毛100%)、春は掛けふとん(冬と同一)、夏はタオルケット(木綿100%)を用いた。敷きふとんの各内容綿についてそれぞれ2組の敷きふとんを作成し、被験者3名が全試料に1回は就床することとした。実験はなるべく日常生活に即した状態のもとで行った。測定は皮膚温3点・寝床温度5点・寝床湿度5点で、入床より起床までの8時間を10分間隔で記録し、寝姿の動きも同時に記録した。

結果 室内の平均温湿度が、冬(11.7℃・71.2%)、春(18.4℃・73.3%)、夏(29.1℃・61.0%)、秋(21.9℃・64.6%)における寝床実験の結果、就床中に維持される寝床内の温湿度レベル・変動の様相には、個人差はみられるが、内容綿別による顕著な差異は認められなかった。